

作り物のいのち 後編

平成 25 年 3 月 18 日(月)

幻想譚工房

「みんな、聞いてくれ」

頃合いを見計らった睦月が部屋の中央で声を上げた。賑やかだった調整室が静まり返る。私とクヴァレも睦月の方向に向き直った。

「今日は島の外に出るための認定試験という事になってるが、実態は動作訓練だ。模擬戦闘も用意されているが、あくまでしっかり動けることに主眼を置いているから、用意された 12 時間の間納得いくまで調整を繰り返してほしい」その後睦月から試験の内容について説明があったが、なんと試験にはシナリオが用意されていた。

ざっとかいつまんで説明すると、制御不能に陥ったエインセルが大勢平野に立っている。動かそうにも強硬に抵抗するので、攻撃して停止させる。というものだった。

それに、我々側は物資不足のため補給や調整が不可欠であり、前線と前哨基地を頻繁に往復しながら任務を継続するという項目が付け足されていた。

保安庁で普段行っている訓練ではごく当たり前のように状況設定が用意されているらしいが、私たちの動作試験にまでシナリオが用意されてるとは思わなかった。……かなり無理のある設定だが。

「今回平野に立っているのはエインセルではなく、グテムリンと呼ばれる訓練用のロボットだ。今回は動作試験ということで初期位置から動かないから、落ち着いて攻撃動作を習得してほしい」

「グテムリンはエインセルに限りなく近いロボットでな、相手の熟練度や任務、シナリオに応じてあらかじめ強さや役割を入力するんだが、もっとも強い設定にするとそれは悪魔の名に違わぬ強さで精鋭達の心を折るんだ」

クヴァレがそっと耳打ちした。

「弾も実弾ではなく仮想弾を使用する。今日の状況は全て電子化されて記録されるから、各々後で見返して今後の調整に役立ててくれ。今日は最善を尽くしてくれ、幸運を祈る」

「さあ、試験を始めるぞ。文月、準備はいいか？」

「もちろんだ」

「調整には万全を期しているが、すこしでも違和感を感じたらすぐに上空で待機している輸送班を呼んで前哨基地に向かってきてくれ。こちらでもモニターしているから必要に応じて呼ぶからな」

集合地点が騒がしくなってきた。みんな出発するための最終調整に入ったのだ。

「本格的な実践形式の試験は今回が初めてだから、初めて動かしたり見たりする機能や装備がたくさんあるはずだ。形は違えどそれらは全て保安庁で正式採用されてるシステムをベースにしてるからそれほど難しくはないはずだ。幸い敵は直立不動で向かってこないから、分からない事は全部埋めるつもりでやってやろう」

「分かった」

クヴァレの合図で出入り口に向かって歩き出す。初めての本格的な装備のため普段の状態の何倍も重量が増えている。パワーアシストが効いてるから重くはないものの、慣性に振り回されるようにしてよろよろと歩みを進めることになった。

「クヴァレ、こんな状態で本当にちゃんと動かせるのか？」

「初回起動だからそれぞれの制御系でキャリブレーションをしてるんだ。しばらくすれば姿勢制御がかかって楽になるはずだからもう少し辛抱してくれ」
姿勢制御や火気管制その他多くの制御系はそれぞれ独立したシステムが用意されていて、プラグを介して私の五感と連動するようになっているらしい。管理や制御はそれぞれのシステムが行うから私は思った通りに行動するだけでいいようだった。……どうりで装備を身に付ける機会がほとんどなかったわけだ。私の普段身に付けてる装甲にセンサーを仕込んで、それを身に付けて行動するだけで私の癖をシステムに学習させていたらしい。

初日に身に付けてるものを脱げと言ったのはそういうことだったのか。少しくらい説明してくれればよかったのに。

そうこうしているうちにキャリブレーションが効いてきたのか歩くのが楽になってきた。こんなに重い装備を身にまとっているというのに、楽々行動できるなんて不思議な気分だ。そのまま軽い足取りで発着場に向かうと、睦月が紙を見ながらそれぞれのメンバーに発着場の案内をしていた。

「文月は……1番ポートで卯月の次に出発してくれ。担当はエミリーだ」

「エミリーが担当なのか」

「あぁ、本人たっの希望だそう。それじゃあ頑張ってこいよ」

1番ポートに向かうと、卯月が出発の準備を整えていた。

「卯月、装着機はどうだった？」

壁の向こうで騒いでいる声が聞こえてきたのだ、きっとすごい惨状になっていたことだろう。

「まったく、気持ち悪いことこの上ないわよ！ あんなものがなくなっって一人で装備くらい整えられるってのに……」

卯月は向こうを向いたままブツブツ言いながら身支度を進めている。

「そういう亀ちゃんはどうだったのよ、薄着になるのが嫌なあんたがおとなし

く剥かれるはずがないと思うけど？」

「私も嫌だ。でもこれだけ膨大な装備を手作業で着けるのは無理だから諦めた」
そう言うと、卯月は振り返って私を上から下まで見回した。

「ますます亀らしくなっちゃって、重たくないの？」

「ああ、パワーアシストがついてるからここまで普段と変わらない調子で歩いてこれた」

「さすがに亀ちゃんくらいになったら装置無しじゃ着替えられないかもしれないわね」

「そういう卯月こそ、それを手作業でつけようなんて普通は考えないと思うが」
卯月は至近距離型なので武器こそ少ないが、推進装置を多く身に付けていた。大出力のブースターの他、至るところにパーニヤがつけられている。供給用のジェネレーターが背中から翼のように伸びており、打ち所が悪ければ爆発するか周囲を汚染しそうだ。

「だからといってあの装置に毎回着替えさせられるかと思うと憂鬱なのよね…
…。私も亀ちゃんみたいに常に装備を身に付けてようかしら」

「……それだけはやめておいた方がいいと思う」

全身から様々な推進装置や給電装置が突き出しているのだ。歩くだけで回りの人にぶつかってしまって大変だろう。

「冗談よ。それじゃあお先に失礼するわ、また後で会いましょ」

そう言うと、卯月は自分のブースターを使って輸送班と一緒に飛び立っていった。

「文月先輩、今日は私が担当になりました。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

駆け寄ってきたエミリーと握手しようと右手を差し出すと、エミリーの両腕に大きなアームが取り付けられている事に気がついた。腰の辺りにも同じものが一對両脇に装着されている。

エミリーの腕を取り囲むように筒状の機械が取り付けられており、その隙間からエミリーの手が見える。手には何も持っていないようだが、筒の内側に入り込んでしまって外から触れることはできなさそうだ。油圧シリンダーが4本、機械の指から外側に突き出していた。

「これですか？」

私の視線を感じたエミリーが胸の前で機械の指を開いたり閉じたりして見せた。エミリーの指の動きに連動して4本の機械の指が交互に噛み合わせるように動く。

「航空輸送用の固定用アームです。腕のプラグに装着して使うんですが、これを4箇所ある文月先輩の運搬用ソケットに取り付けて固定するんですよ。こん

な状態なので握手はできないんです」

エミリーが残念そうに言った。

「さあ、私たちも行きましょう。黄色い枠の中に入って段差に背を向けて立ってください」

エミリーに言われた通りに枠の中に立つと、背後の段差に立ったエミリーが私の背中に手を当てる。すぐにガシャンという音を立てて体が固定される感覚がした。

「さあ、いきますよ」

その声と同時に低周波の音が鳴り始め、ふわっと体が宙に浮いた。そのままゆっくり回転して地面と体が平行になると、一気に前方に加速した。

「うわぁ」

地面に擦れそうな高さのまま一気に進むものだから声が出てしまった。やがて背中が引っ張られる感覚がしてエミリーが高度をあげていった。

ほっとして正面を見ると薄暗いトンネルの先に光が見える。おそらくあれがトンネルの出口なのだろう。

「エミリーに運んでもらうのは二回目になるのか」

「そうですね、一回目は事故のあったときで、私の初任務の日でした」

「初めての任務で私を運んだのか」

「リーダーからそういう機会は多々あるって聞かされていましてので。でも初任務から早速だったのでちょっとびっくりしちゃいましたが」

「あのときはほんとうにすまなかった」

「そ、そんなつもりで言ったんじゃないですよ。それにそのお陰でこうして文月先輩と仲良くなれたんですから、そんなに気に病まないでください」

やがてトンネルを抜けて地上に出た。辺り一面短く刈られた草原が広がっているが、所々激しく削れて土が見えているところがあった。

前方に私たちの影が降りている。両脇に大きな翼が伸びているが、中心の影が翼に比べて大きく、バランスの悪い鳥のようだ。

胴体が固定されているため背後を振り返ることはできないが、左右に首を回すと長い翼が見えた。普通の翼と同じだが、両端に一個ずつ大きな吸気口みたいなものがくっついていてかなり重そうだ。

「こんな重装備の私を運んでいて重くないのか？」

私の総重量は事故のあった時に比べ大幅に増していた。あのときにも結構な装備のつもりだったが、今の装備に比べればあの時の装備は軽装もいとこだ。

「輸送機は重力制御装置を使って運搬するので、指定半径内にさえ入っていれば重量はそれほど感じないんですよ、これくらい軽いうちです」

「そうだったのか、他の飛行型と違って主翼が大きいから翼で飛んでるのかと

思った」

「輸送機だけじゃなくて、空を飛ぶときには全員重力制御装置を使うんですが、装置が主翼に格納されているんですよ。」

「そうなのか、でもすると電力はどこからとってるんだ？ 重力制御ともなればかなり電力を使いそうなものだが」

「輸送型は電力も主翼からなんです。飛んでるときに大気中の魔力を発電に使うんです」

魔力とは大気中を漂っているエネルギーの粒子のようなものだ。目には見えないが、ディスパテルという種族はこれを使って魔術を使うほか、エインセルの中にも大気中からこれを取り込んでエネルギー源にする研究が進められている。だから吸気口みたいなものがついているのか。

『おはようございます。トラフィックコントロール担当アクアです。あなたのドメインを確認しました。VPN 接続を許可します』

『おはようふみちゃん、調子はどうかしら？』

機械的な淡々とした通信のすぐ後に、ソフィアの声で通信が入った。

『ふみちゃんとペリカン、神無ちゃんの計 3 人のレーダー管制が今日の私の役割よ。今日は張り切ってふみちゃんのサポートをするからよろしくねっ』

『クヴァレだ、問題なく通信できているようだな。文月の状態はこっちで確認してるから異常箇所があったらすぐ前哨基地に呼ぶからな』

『こちらは睦月だ、開始地点に降りたったらまずは歩いたり走ったりしてくれ、落ち着いてやればできるから頑張れ』

トンネルを抜けてから急に賑やかになった。4 人以外にもたくさんの人から順番に挨拶の通信が入ってきた。

この人達一人一人が遥か上空や遠い管制塔で私たちのために頑張ってくれている人たちなのか。

全員の挨拶が終わる頃、正面の地面に白色で描かれた大きなリングが見えてきた。エミリーはそのリングの中心に合わせるように上空で静止すると、ゆっくり降下する。

私の両足が地面につくと急に体の軸が動くようになった。エミリーが固定を解いたのだ。

「それでは、何かあったらすぐに呼んでください、前哨基地まで運びます」

「わかった、ありがとう」

高度を上げていくエミリーに向かって手を振ると、彼女はにこっと笑って飛去っていった。

『みなさん、準備はよろしいですか？』

ソフィアの他人行儀な声が聞こえる、さっきと違って他の人にも聞こえる通信

なんだろう。

「こっちは大丈夫だ」

『ええ、私の方も大丈夫よ』

『私も問題ありません。先輩方、今日はよろしくお願ひします』

続けざまに卯月と神無月の声が聞こえてきた。

『こちら睦月だ、それでは始めてくれ』

『了解しましたわ。戦術データリンクシステム、セッション開始します』

ソフィアの声と同時に頭の中に卯月と神無月、そしてグテムリンと思われる十数人の居場所が頭の中に入り込んできた。

『全員準備ができたようだな、それではまず自分の周囲に描かれたリングの中を動き回ってくれ』

私の周囲に半径 50 メートルほどの円が描かれている。歩く分には発着場までの移動で問題なかったから、今度は思いきり走ってみた。

最初だけ大きな反動を受けたが、すぐにキャリブレーションがかかって問題のない程度に収まってくれる。

『クヴァレだ。文月、つぎは飛び跳ねてみてくれ。様々な方法でな』

……様々な方法、ね。

大雑把な指示にどう応えようかと考えつつ、とりあえず垂直に飛び跳ねたり真横に飛んだり色々試してみる。まあ、足りない飛び方があればクヴァレがなにか言うだろう。

パワーアシストや姿勢制御のお陰で重量は感じないものの、さすがに慣性の力が全身にかかるのを感じる。でもこれは慣れの問題だろう、この装備を着てしばらく過ごせばこの挙動にも慣れて思い通りに動くことができると思う。

『順調だな文月。ここまでで気になった点はあるか？』

「問題ない、思った通りに動いてくれている」

『よし分かった。それでは背面部のアームの試験をする』

お咎めはなかったようだ。さて、ようやく戦闘といったところか。

『右アームのライフルを展開してくれ』

言われた通りにすると、急に頭の中にもうひとつ視界が現れた。

「うわっ、なんだこれは」

『落ち着け、それはライフルの目から見た視点が文月の脳と繋がってるんだ、少し驚くしれないがすぐに慣れる』

「そうか……」

ライフルの「目」とやらは望遠鏡のようだった。遠くに立っているグテムリンがすぐ目の前にいるようだ。他にも色々な表示があるが、ライフルの状態や相手との距離など色々なものが視界の中に入り込んでいる。でも私自身の視界に

は見えない。自分の視界を妨げるわけでもなく、ごく自然に自分の視界として認識することができる。奇妙な感覚だった。

『この「目」は武器ごとに用意されている。自然に使いこなすまでには少し時間がかかるかもしれないが、慣れれば移動しながら複数の「目」を同時に視ることができるはずだ』

ライフルの「目」でグレムリンの事を眺めていると、突然青い丸が赤く変色した。赤い丸がわずかに中心からずれるように動き、高速で点滅しだした。

「クヴァレ、ライフルが撃てと言ってるみたいだぞ」

『ためしに撃ってみるんだ。レティクル……マーカーを敵に合わせて発射と念じてみる。ただし反動が大きいから片膝を立ててからの方がいい』

「……分かった」

クヴァレにそう返事をすると、大きく深呼吸を一回する。これから撃とうとするライフルは、事故の時に使用したのと同じものだ。

あのときの光景が頭をよぎる。今度誤作動を起こしたら上空を飛んでいるエミリーを事故に巻き込んでしまうかもしれない。それになんの罪もないグレムリンをこれから粉々に粉砕してしまうのだ。

『あのときは軽装の状態で今回の標準装備用のライフルを運用したから姿勢制御が大きく崩れたし、発射の衝撃に耐えられなかった。だが今回は違う、適正装備を身に付けているからこの前のようなことは起こらない、安心しろ』

『ふみちゃん、これは仮想弾だから相手に危害が加わることはないわ、大丈夫よ』

クヴァレだけでなくソフィアからも応援をもらってしまった。私だってこの一ヶ月半のあいだ何もしていなかったわけではない。事故のあと、必死に私が使う武器の特性や射撃方法を勉強したのだ。もう二度と周りの人を危険な目に遭わせたくなかった。

「大丈夫、できる、大丈夫……」

そう呟くと、片膝を立てるように座りポインタをグレムリンの中心に合わせた。心臓が高鳴って息苦しくなる。ほんとうに大丈夫なんだろうか、怪我をしないだろうか。

小さく左右にゆっくりと動くポインタをグレムリンから外れないように合わせていると、はたり、とポインタの動きが止まった。

『今だ、撃て』

クヴァレの声につられるように、あわてて発射と念じる。

この間と同じ、腹に響く音と衝撃が全身を走り抜ける。発射された青い光線はゆっくりと画面中央からポインターの方へ軌跡を残し、やがてグレムリンがそのまま後ろに倒れた。レーダーから赤い点が一つ消える。

「……っはあ」

急に周りの音がうるさく感じられ、私は溜めていた息をゆっくりと吐いた。いつものまにか息を止めていたらしい。

倒れていたグレムリンがおくりと起き上がると、そのままどこかに歩いていった。弾を撃ってようやく仮想弾が安全だという意味が分かった。実際に弾など撃っていないのだ。コンピュータが計算した通りの反動を受けて、計算した通りの弾道で弾が飛ぶだけなのだ。

『ふみちゃんすごーい』

『文月先輩、さすがです！』

ほぼ同時にソフィアとエミリーから通信が入ってきた。私はというと情けないことに地面にへたりと座り込んでしまった。緊張の糸が切れた……とでも言うのだろうか、一気に全身の力が抜けてしまったようだった。

「……他のメンバーは？」

『睦月だ。約半数が調整のため前哨基地に帰還しているか帰還途中だ。戦闘まで行ったのは長距離攻撃手段を持っている中でも如月とお前さんだけだ』

「そうか……」

他のメンバーは結構苦戦しているようだ。レーダーに写っている黄色い点もいつものまにか 4 つほどに減っている。むしろ今日初めて身に付けた装備なのになんかこんなに動けるのか不思議なくらいだった。

「なあ、クヴァレ」

クヴァレの方では何か異常な数値は出てないのだろうか。

「……クヴァレ？」

話しかけても返事がない。また考え事をしてるんだろうか。

『ん……ああ、何でもない。試験を続けてくれ』

「次はどうすればいいんだ？」

『そうだな円の外に出て思った通りに動いてくれ』

「左アームの装備は点検しなくて良いのか？」

『……そうだな、好きなタイミングで使ってくれ』

またしても大雑把な指示にがっかりしながら、私は円の外まで歩いて出た。

『睦月だ、調子がいいようだな。そのまま敵を全員撃破してくれても構わないくらいだ』

『神無ちゃんはともかくペリカンの分なんて残さなくていいわよ』

「いやいや、さすがにそれは」

『すでに当初の目的はクリアーしているんだ、どんどん次のステップに進んでほしい』

「そこまで言うなら……」

赤い点に向かって走り出す。レーダーの端の方で如月と表示された黄色い点がグレムリンに向かって攻撃を繰り返しているのが見えた。

グレムリンとの距離を縮めると、持っている武器を順番に使い始めた。これまでの訓練の成果を試したいという気持ちもあるが、何より相手を物理的に傷つけないで済むということがとても楽だった。

そのうち残弾数が減ったことを知らせるアラートが表示され、休憩もかねてエミリーに前哨基地まで運んでもらうことになった。

「文月先輩すごいです！ 大活躍でしたね」

『こちらは睦月だ、動作試験でここまでの成果をあげるとは大したものだ、残りの時間も有意義に使ってくれ』

「……ありがとう」

戦うことにはまだ少し抵抗があるが、ほめられるのはうれしい。これまでは他人に認められたいがためにやってきたが、これからは喜んでくれる人のためにも頑張りたいと思えるようになった。

……なんて、実際に前線で頑張ってる人が聞いたら甘いと言われそうだけど。

「クヴァレ？」

『……』

「クヴァレ、どうしたんだ？」

『……』

何度呼び掛けても全く応答がない。これまではぼうっとしてても何度か呼び掛ければすぐ我に帰ったのに。今回のようなことは初めてだ、なんだか嫌な予感がする。

「エミリー、大至急で前哨基地まで向かってくれ」

「了解です」

エミリーは前屈みになると、基地に向かって急加速した。

前哨基地は簡便な作りで、滑走路の両脇にメンバー毎に区画分けされた簡易調整所が設けられている。ちょうど調整を終えたメンバーが 3 人ほど滑走路に出てきており、着陸は難しそうだ。

『ふみちゃんの調整エリアが一番奥の右側よ』

「分かった、ありがとう」

ソフィアからの誘導を受けて、着陸せずにそのまま自分の調整エリアに向かう。上空から見下ろしたがクヴァレの姿は見えない。

「エミリー、前哨基地の上空を一周してもらえるか」

「わかりました」

前哨基地の上空をゆっくりまわるがクヴァレを見つけることができない。

クヴァレ、いったいどこにいるんだ……。

滑走路が空いたのを確認して着陸し、急いで自分の調整エリアに向かうと、私の状態をモニタリングするらしい端末の電源が入ったままだった。どうやら作業中に席を立てそのままのようだ。

「クヴァレ、どこにもいないのか？」

『クヴァレ、どこにもいないのか？』

端末から私の声がやや遅れて聞こえた。これでは通信でいくら話しかけてもクヴァレには聞こえない。

「文月、ご苦労さん。この後も出るんだろう？」

その声に振り返ると、睦月が入り口に立っていた。

「クヴァレがどこに行ったか知らないか？」

「いないのか？」

「上空から探し回ったんだがどこにもいないんだ」

「ふむ、ちょっと待っててくれ」

そうやって睦月は目を閉じる。それから 30 秒ほど待ったところで再び目を開けた。

「今管理班に問い合わせてみたら、30 分前くらいにクヴァレの ID が前哨基地のゲートを出ているログが確認された。おそらくその時に出たんだろう。どこへ向かったかは分からないが列車に乗った可能性が高い」

「分かった、ありがとう。とりあえず駅へ向かってみる」

睦月に礼を言うと、そのまま調整エリアの外に向かって走り出した。

「待て、今向かってどこに行ったか分からないぞ」

睦月の言葉を背中に浴びながらも、そのままゲートの方向に向かって走る。案内ゲートの外や駅の辺りに立っているかもしれないと思ったからだ。

「文月先輩、待ってください」

ゲートを出ようとしたところでエミリーに止められた。

「いまリーダーが島内上空の航空許可を申請中です。さっきみたいに空を飛んで調べた方がいいと思います」

「それなら申請が通るまで駅に行って調べてみるつもりだ。誰かがクヴァレのことを見ているかもしれない」

広い島だ、やみくもに飛び回るより少しでも情報があつた方がいいだろう。それにクヴァレが地上にいるとは限らない。

「……わかりました、それでは申請が通り次第連絡します」

「ありがとう」

駅の発着場まで走っていくと、発着場は人で混んでいた。

発着場の広場に大型のディスプレイを設置して、そこで試験の様子が見られる

ようになっていたらしい。一部の人は私の姿を見て驚いたような表情をした。私がここにいるのは確かにおかしいかもしれないが、なにもそんなに驚かなくても……。

「文月ちゃん……なのか？ 一体どうしたんだ」

ハワードも今日は見に来てくれていたらしい。

「クヴァレがいなくなってしまうって。どこに向かったか心当たりはないだろうか？」

そう言うとハワードの顔色が変わった。

「……詳しく話をしたい、ちょっとついてきて」

ハワードに案内されて駅のホームへ入ると、混んでいた広場とは違いがらんとしていた。もう少しで列車が来る時間だが、駅に人の姿はない。ハワードは周囲を確認して人がいないことを確認すると、私を振り返って言った。

「一ヶ所、心当たりがあるんだ」

「それはどこなんだ？」

「クヴァレは……」

ハワードは何かを言いかけて口をつぐんだ。言って良いものか悩んでいるようだった。

「文月ちゃんはクヴァレから彼の過去についてなにか教えてもらったかい？」
やはり、クヴァレの過去が関わっているようだ。私が知っているクヴァレの過去といえば、病室で聞いた『また失敗をしてしまった』ということだろうか。その失敗のせいでクヴァレは自分を犠牲にしてまで調整に打ち込むようになってしまったのだ。ここに来る前は軍医だから治療で失敗をしてしまったのかもしれない。もしくは装備の調整やメンテナンスで失敗をしたのかも。けれど、本人に聞こうとしても上手くはぐらかされてしまって、クヴァレがこれまでどんなことをしてきたのかは全く分からなかった。

「何度もはぐらかされてしまった」

「そっか」

ハワードはしばらくなにかを考えているようだったが、やがてぽつりと一言漏らした。

「クヴァレはとある事件で、大きな失敗をしてしまったと思込んでいるんだ」

「してしまったと思込している？」

ハワードは黙って頷いた。

「もう何が起きたのか大体察しはついてるかもしれない。難しい局面で誰のせいでもなかった。でもクヴァレはその事をずっと引きずっているんだよ」

「でも、これまでもぼうっと考え込んでることがたくさんあったんだ。でもどうして今回は訓練の途中で居——」

言いかけてはあった。私が歩いたり走ったりしてるときは平気だったのに、ライフルを発射した後でクヴァレの様子がおかしくなった。もしかしたら武器を使うことに抵抗があるのかもしれない。

列車の到着を告げる声がプラットフォームに響き渡った。程なくしてプラットフォームに入ってくる列車を眺めながらハワードは言った。

「クヴァレは『平和の島』にいると思う、この列車で 30 分のところにある湖から行けるよ」

「ありがとう」

「あんな事がありながらもクヴァレは必死に頑張っているんだよ、逃げた俺とは違ってね。きみはそんなクヴァレを支えてくれるかい？」

目の前で開いた扉から列車に乗ると、振り返って言った。

「当然だ、クヴァレは大切な仲間なんだから。次にハワードと会うときにはクヴァレの自信を取り戻して見せる」

「……文月ちゃん、きみは本当にかわいい人だな」

ハワードが呟くと同時に扉が閉まる。列車の窓からハワードの姿が消えた後で、睦月とエミリーに通信でクヴァレの位置を伝えた。

私たちエインセルが住んでいるこのデュオスクロイ島の中でも標高の高いこの平和の島からは、私たちの住む都市が一望できる。

こんな時でなければゆっくり散歩をして過ごしたい場所だが、今はクヴァレが先決だ。また別の機会にゆっくり見て回るとしよう。

駅の目の前に広がる広大な湖の中央には島があり、この駅の他複数の場所から橋がかけられていた。真っ白な石で造られた長い橋を渡り終えると、ここが「平和の島」と呼ばれる理由がわかった。

「これは……石碑か？」

湖の真ん中にあるこの小さな島には多くの石碑が立っていた。近くにあった石碑を調べると、石ではなく材質の分からない黒っぽい碑の表面には日付と場所と事件の概要が、裏面には多くのエインセルの型番がそれぞれ記されている。ここは過去の事件で犠牲になったエインセルの名前が刻まれている場所だったのだ。そして、その中のひとつ、最近できたらしい新しい石碑の前にクヴァレは立っていた。

8002 年 43 日 (abs) ケフェウス大公国首都アルフィルク全域

暴走した二人のエインセルにより首都が襲撃された。事件発生から 2 時間後に暴走機は破壊され収束。幸い人類に犠牲者は出なかったが、この事件でのべ 300 人以上のエインセルが犠牲になった。

つい最近起きたこの事件は私もはっきりと覚えている。人類を守るために多くのエインセルが盾になって犠牲になった事件。そして私たちのプロジェクトが方向を変えるきっかけになった事件だ。

「クヴァレ、これは……」

「文月、どうしてここが？」

クヴァレは振り返らずに顔だけ上げた。

「ハードに教えてもらった。たぶんここにいるだろうって」

クヴァレは無言で振り返った。夏の暑い風が吹き抜けて辺りの草をさらさらと鳴らす。

「その装備のまま来たのか」

クヴァレに言われて初めて気がついた。いなくなったクヴァレを探すのに夢中で、装備を外す間もなく飛び出してきたのだ。どうりで車で驚かれるわけだ。

「それはともかく。クヴァレ、いったい何があったんだ？」

クヴァレは答えなかった。いや、答えるべきか迷っているようだった。唇を噛み締めて視線を斜め下にそらしている。

「……確かに私には関係の無いことかもしれない。でも、話せば楽になれるかもしれないし、みんなで考えることだってできる。心配なんだ。過去を一人で抱えて、引きずっているものに押し潰されそうなクヴァレが」

クヴァレが時々考え事をしていることも、今回みたいにいなくなってしまったことも、すべてはクヴァレが抱えている悩みが根底にある。ここでそれを聞かずに訓練の途中で抜け出したことを問い詰めても何も解決しないと思った。それならば、その悩みを少しでも和らげることができれば……。

「……俺はこのプロジェクトに参加する前、軍医見習いとしてとある航空中隊についていたんだ」

少し長めの沈黙のあと、クヴァレがぽつりと漏らした。

12人で構成されるその航空中隊は、上空から攻撃をするというよりも地表から20メートル以下という低高度で木々や民家の合間を縫って飛行しながら急襲する戦法を得意としていた。

その特殊なスタイルから訓練中のケガも多く、それぞれの中隊に一人ずつ衛生医療部と航空整備部の人員が割り当てられていた。それがクヴァレとハードだった。

中隊の面々はみんないい人で、彼らの一員として寝食を共にする間にあっという間に打ち解けて家族同然のような間柄になった。軽い冗談を言い合うように

なり、お互いに全幅の信頼を寄せるようになる。

そんな彼らの訓練は厳しく、毎日の怪我の治療や機体の整備が一人では追いつかない事がほとんどだった。クヴァレとハワードはいつしかお互いの仕事を一緒にやるようになっていた。

これがクヴァレが医者なのに整備に長けていて、私から見たハワードが医者のようにだけ作業着が似合いそうだった理由だった。

事件の前日、装備の手入れはクヴァレが一人で行っていた。ハワードは訓練中に一人の隊員の推進装置が破損し、そっちの方に手を取られていたのだ。

これまでに何度も繰り返し、体に染み付いた手つきで 12 人分の武器のメンテナンスをする間、クヴァレはひとつ疑問を感じていた。

どうして俺たちは相手を傷つけるための訓練を続けているのだろうか。

確かに遠い昔はエインセル同士で傷つけあう時代があった。けれど今は違う。戦争は終わり、文明を失った人類の間に入って行く末を見守る存在と化したエインセルに、こんなものはもはや必要がないのでは、と。

結局その日は武器だけのメンテナンスを終え、残りの装備は翌日に終わらせる事にした。翌日は中隊の訓練も無かったため、ハワードと二人でやればすぐ終わると思ったのだ。

事件はその翌日朝に起きた。首都アルフィルクの外れにある平原で何年も行方不明だった二人のエインセルの反応が確認されたのだ。そのまま二人のエインセルはゆっくり首都へ向かって歩き出した。

近くにいたエインセルが話しかけようとしたが、二人はそのエインセルに致命傷を与えると歩みを進める。通信での呼びかけにも応答しない。

何の意図があってエインセルに致命傷を与えたのかは計りかねたが、何より二人は明確な殺意を持って襲いかかってきた。すぐに首都に住むエインセルに非常事態宣言が発令され、本島にいる中隊を始め多くの部隊に出動命令が下った。現地に向けて緊急出動する中隊のメンテナンスはまだ完全ではなかった。しかし、フットワークに優れた中隊は現場に到着後すぐに行動を開始することができる。応援部隊の準備ができるまで持ちこたえてくれれば後は何とかするとの事だった。

超高速輸送隊によって島から遠ざかる中隊の飛行機雲を見て、クヴァレは彼らの無事を祈った。

前線に到着した中隊はすぐに二人のエインセルの元に向かったが、彼らは首都深くまで入り込んでいた二人から人類を守るためにその身を盾にして、一人、また一人と餌食になっていく。

クヴァレは全身が凍りつくのを感じた。大切な仲間が一人ずつ、エインセルの手によって倒されていく。遅れて医療チームとして現場に到着した時には、中

隊は壊滅していた。

「自分のミスで全員失ってしまったんだ」

「違う！ それはクヴァレのせいなんかじゃない」

「だったらどうして彼らは為す術もなくやられてしまったんだ、武器だって使った形跡が見当たらなかった」

「それは……きっと他に理由があったはずだ、クヴァレの整備はいつだって完璧だったじゃないか」

今日だってクヴァレのお陰でこんなにも動けることができるのだから。

「……装備のメンテナンスについては今更どうでもいいんだ。不完全な状態だった彼らを止めることができたんじゃないか、失わずに済む方法があったんじゃないか。そう思うとどうしようもなくやるせない気持ちになる」

クヴァレは斜め下を向いて唇をかみしめた。

「何が正しいのか分からなくなってしまったんだ。確かに暴走機や他人に害をなすエインセルが放置されているとたくさんの人が死ぬかもしれない。だがお前がグレムリンを撃ったところを見て、少し気分が悪くなってしまった。……俺たちエインセルが作り物の命だったとしても、同族同士で殺し合うのは嫌なんだ。もう大事な仲間が死ぬのを見るのは、嫌なんだ」

「そんなの……誰だって嫌だ」

私だってできることなら同族で殺し合うようなことはしたくない。人類や魔物に対してもだ。でも、それ以上にクヴァレやソフィアが傷つくのは嫌だ。私は私を支えてくれる人を守るために戦うと決めた。

きっとクヴァレも中隊と行動を共にしていたときは私と同じ考えだったのだろう。

もし私がクヴァレやソフィアを失ってしまったら……そんな事考えたくもない、きっと心が壊れてしまうだろうから。けれどクヴァレは一度に 10 人以上もの仲間を失ってしまったのだ。

どんな声をかけたらいいか分からなくなってしまい、その場に佇むことしかできなかった。

「クヴァレ、お前さんは優しすぎるよ……」

背後から睦月の声がした。振り返ると睦月の後ろにはエミリーもいる。

「あの日、現場にいたエインセルのうち近接型以外の者には武器の使用が禁止されていた。人類に流れ弾が当たらないようにと配慮しての事だったそうだが、そのせいで多くのエインセルを失ってしまった」

「……」

クヴァレは無言で話を聞いていた。

「だからといって、作り物の命であるエインセルが命を落として良いはずがない。だから俺たちみたいな存在ができたんだ。人類も、エインセルも、両方の命を守るための存在が」

「命を、守る……」

「……いずれ大切な仲間を守るために、俺たちが相手の命を奪う機会が必ず来るだろうし、奪われる機会ももしかしたら来るかもしれない。その時にはお前さんがそばで傷ついた彼らを励まし支えてほしいんだ。守るべき者のために命をかける彼らのために」

そこまで言って、睦月は表情を緩めた。我が子を見るような、とても優しい目つきだった。

「ケフェウス大公国の端、エラキスという街に数多くのエインセルを治療し、数多くのエインセルを看取った医者が住んでいる。その人を訪ねてみる、答えが出ずとも、少しはお前さんの気持ちに整理がつくかもしれないな」

「睦月、それって……」

「よく頑張ったな文月、試験は合格だ。島の外に出ることを許可しよう」

そこまで言うと、睦月は踵を返して歩いて行った。エミリーも何か言いたそうにしていたが、軽く頭を下げると小走りで睦月の後をついて行った。

私はクヴァレに手を差し出した。

「行こう、クヴァレ。例え何が起こったとしても、私は絶対に死なないから」